

西部邁・波頭亮著「知識人の裏切り どこまで続く、平成日本の漂流 - 」

ちくま文庫、筑摩書房 2010年3月10日刊を読む

幸福とは何か

波頭 すごく便利なものはなくても、そのすごく便利なものの副作用で歴史や文化が崩壊してしまうようなリスクを回避するというスタンス。まさに継続的に、歴史的に安定していること自体の価値を重く見ているのだと思います。

さっきのインテリの話じゃないですけど、例えば、長州の片田舎で素浪人をやっていた桂小五郎が、明治政府でスターになるのも一つのハッピーな人生かもしれないけど、素浪人のまま寺子屋で子供に文字を教えたり、お百姓さんの手伝いをして人生を送るのも一つの幸せな人生かもしれない。現代でも、自民党政権だろうが民主党政権だろうが、営々とうまいラーメンを作り続けて、それで近隣の人たちに「いやあ、ここのラーメンの味は変わらないから」といって何十年も喜ばれているラーメン屋のような、まさに草の根的に社会に支えている人たちの人生って、結構幸せなんじゃないかと思います。社会の怒濤に流されない、自分自身のものであるという実感のある、自分の分に応じた人生はしみじみ幸せなものである気がします。

P242 ~ 243

[コメント]

現代のレイトカマー、波頭亮氏の現代幸福論。1つの素晴らしい生き方。

- 2010年3月19日 林明夫記 -